

Title	「馬」に関することわざ：「馬」をどう捉えてきたか
Author(s)	馬場, 俊臣
Citation	札幌国語研究, 20: A1-A14
Issue Date	2015
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/7782
Rights	

「馬」に関することわざ

——「馬」をどう捉えてきたか——

馬場俊臣

1 はじめに

「ことわざ」は、古くから言い伝えられてきた、教訓・風刺・真理などを含んだ短い言葉であり、様々な事物に対する人々の見方や捉え方が反映されている。

馬場（2010）～（2014）では、それぞれ、「牛」「虎」「兎」「龍」「蛇」に関する日本のことわざを取り上げ、ことわざに反映された牛・虎・兎・龍・蛇に対する人々の捉え方の特徴を見た。本稿では、「馬」に関することわざを取り上げ、「馬」に対するどのような捉え方が見られるかを示したい。

本稿で取り上げることわざは、『故事俗信ことわざ大辞典 第二版』（北村（編）（2012））に基づいている。同書「付録全文データ収録CD-ROM」の「見出しキーワード」検索によれば、「馬」をキーワードとすることわざは305句（俗信・俗説、言葉遊び・しゃれ、慣用句、故事を含む）あり、十二支の動物名を含むことわざの中では最も多い。

馬は日本人にとっても身近な動物であった¹。5世紀以降、モンゴル起源の馬が九州北部へと入り日本各地に広がり、それ以降、家畜として乗用及び運搬、また農耕や軍馬などに重用されたという。明治以前の馬は体高の平均が130センチ程度の中型馬であったようだ。明治時代に入り、国内の軍馬が外国の改良馬に比べ劣っていることを軍部が痛感し、日露戦争後、外国からサラブレッドやペルシュロンなどの種馬を輸入し国内の雌馬と交配することで軍馬の改良を進め、飼育頭数が急拡大した（ピークは1941年の約160万頭）が、その一方で、外来馬種との交雑が進み日本固有の馬が各地で短期間に姿を消していったという。第二次大戦後は、自動車普及するなどした結果、家畜としての役割も失われてしまい数は激減し、現在では国内で約8万頭（半数がサラブレッド）（在来馬は約1700頭）になっているようである。

本稿では、日本のことわざ²を見ていく。言うまでもなく「鹿を馬（誤りを強引に押し通すこと）」「将を射んと欲すればまず馬を射よ（大きな目標を実現するためには、まず手近なものから片付けていく方がよい）」「千里の馬はあれども一人の伯

¹ この段落の記述は、朝日新聞（2014）、田中（1989）、原田（1997）に基づく。

² 『故事俗信ことわざ大辞典 第二版』に漢籍類及び西洋での出典が示されていない表現は日本のことわざとみなす（俗信・俗説等も除く）。

楽は無し（いつの時代でも有能な人材はいるが、これを登用し腕を発揮させる名宰相や為政者は少ない）「天高く馬肥ゆ（秋がさわやかで心地よい季節であること）」「人間万事塞翁が馬（吉凶や禍福は変転きわまりない）」など中国の故事成語などが元になった中国に源を持つものも多い。また、「馬を水辺に連れていくことはできても、水を飲ませることはできない（機会を与えることができても当人にその気がなければどうにもならない）」「四足の馬でも躓く（四本足の馬でもつまずいて転ぶことがあるのだから、人が失敗することもあるのは当然で、寛容に見守るべきである）」「驢馬が旅に出ても馬になって帰りはしない（愚か者が旅に出ても賢くなって帰ってくるはずがない）」など西洋のことわざに由来するものもある。さらに、「馬の糞を踏み付けると力が強くなる／背が高くなる／よく走れるようになる」「春先の馬の夢は大吉」などの俗信・俗説や「馬から落ちて落馬する」「馬の糞で段段」などのことば遊び・しゃれなどもある。

次節で、馬に関することわざにおいて注目された馬の特徴を分類し、ことわざを示していく。「(1) 全体的特徴」で馬自体をどのように捉えているかを見る。「(2) 体の各部分」「(3) 動作・行動」でさまざまな体の部分や動作・行動に注目したことわざを分類しながら取り上げる。「(4) 乗馬・飼育」で特に多い乗馬や飼育に関することわざの特徴を見ていく。なお、()内に示した解釈は『故事俗信ことわざ大辞典 第二版』に基づいている。関連する情報も随時補う。

2 馬の特徴

(1) 全体的特徴

(ア) 価値が高い・優れている

- ① 馬百石（馬一頭を飼うには、米100石もの多額の収入が必要だ。）
- ② 千両の馬にも傷／百貫の馬にも驚（どんなに優れたものでも欠点がある。）
- ③ 馬を買わんと欲してまず牛を問う（高価なものや値を知らないものを買うときは、身近なものの値段でその店の懸値を知るのがよい。）
- ④ 牛売って馬を買う／牛を馬に乗り換える（優れたほうに取り換える。）
- ⑤ 牛に馬を乗り換える（優れたものを捨てて劣ったほうをとる。）

馬の価値に関して、「ウシは家畜の中でももっとも重要なものと見なされてきたのである。もちろん、ウマも人類の家畜としての価値としてはウシに劣らない。特に、ウシと違うところは、利用価値が、駄用もさることながら、その走力の優秀さゆえに、馬車用、騎乗用としての価値を発揮したことである。（中略）ウマは武士の特徴となり、特権階級の権威の象徴となるのである。」（中川（1988）：71頁）、「馬による動力が蒸気機関の出現まで牽引や輸送の中心であり続けたのは、もちろん他の要因、たとえば容易に複数の馬を連結できること（六頭立ての馬車など）、持久力が優れていること、人の制御に対して鋭敏に反応することなどもあげられるのだ

が、なんといつて馬のスピードをその第一の要因とすることができるだろう。」(日本中央競馬会競走馬総合研究所(編)(1986):153-155頁)とのことである。馬の走力に関しては(3)(ア)参照。

(イ) 無知

- ① 馬の耳に風／馬の耳／馬の耳に念仏／馬に念仏／馬に経文／馬に錢(馬を相手にありがたい念仏や経文をいくら聞かせても無駄である。価値のあるものでも、持ち主によって何の役にも立たない。)

時田(2009:109-110頁)は、「馬の耳に風」について、「見出しの風は春風のこと。もともとは「馬耳東風」といい、中国の李白の詩のなかにあった表現だ。日本でも近世以前から狂言で用いられ、江戸期にはあちこちの分野で頻繁に使われていたことわざだ。」とし、さらに「馬の耳に念仏」について、「この語句は、おそらく前項³の後をうけて言われはじめたことわざかと考えられる。(中略)前項より後の江戸中期以降、主には明治期前後あたりから盛んになったものようだ。」としている。

馬の耳に関しては、「ごく大まかに言えば、ウマの聴力はだいたい人間の一倍半、ネコの約半分、イヌの四割、そしてコウモリの三分の一程度とされる。人間の呼びかけに対する反応についても、例えばイヌが自分の名前を呼ばれた時にほぼ正確に反応するのに、ウマではその反応がはるかに劣っている。(中略)ウマは、人間よりかなり敏感な聴覚をもっているが、大きな音に対しては割合に鈍感というか、すぐ慣れてしまって気にしなくなる傾向が強いらしい。」(原田(1997):121頁)とのことである。また、馬の知能に関しては、「アメリカのコロンビア大学教授C・J・ウォーデン博士が一九五〇年に発表した論文によるもので、われわれになじみの深い動物の知能程度のベストテンが示されている。それによると、高い順に一番からチンパンジー、オランウータン、ゴリラ、四番目にそのほかの普通のサルが位置し、五番からはイヌ、ネコ、アライグマ、ゾウ、ブタ、ウマ……という顔ぶれになる。(中略)大多数の動物学者の観察や実験結果によると、ロバやラバの方が、サラブレッドを含む一般のウマよりも頭が良いらしいというのが、今や定説である。」(原田(1997):133頁)とのことである。

(ウ) 癖がある

- ① 癖無き馬は行かず(癖のある者のほうが個性的で役に立つ。)
- ② 人に人癖馬に馬癖(どんなものにもそれなりの癖があるものだ。)
- ③ 癖ある馬に乗りあり(癖のある馬でも乗り方があるように、一癖ある人間も扱いはりによって個性を生かすことができる。)

馬の癖に関しては、「競走馬にみられる代表的な習癖をいくつか紹介す

³「馬の耳に風」の項。

ると、(1) 蹴癖(しゅうへき) 文字通り、馬房内のハメ板や人間などをやたらに蹴るもの。(2) 咬癖(こうへき) 人や他馬にかみつくもの。

(3) 齧癖(さくへき=グイッポ) 馬房の馬栓棒に門歯を当て、これを支点として空気を呑み込むもの。疝痛(腹痛)を誘発しやすくなる。(4) 熊癖(ゆうへき=フナユスリ) 前肢を左右に開き、前軀を左右に揺するクセ。肢勢が悪くなったり、蹄の外側が削られたりして、脚を痛めやすい。

(5) 後退癖(こうたいへき=アトビキ) つながれることを嫌い、退がったり馬体を反り返らせたりするもの。この他にも、自分自身の胸前や前肢をかんだりする「身っくい、とか、極端に人や他馬を怖がったりするものなどがある。これらの多くは、欲求不満や恐怖感から馬自身が覚え、身につけてしまうものとされている。」(日本中央競馬会競走馬総合研究所(編)(1986):90頁)とのことである。

(エ) 臆病 (3)(ク) 参照。

(オ) 牛との対比⁴

- ① 馬は逆風を喜び、牛は順風を喜ぶ(色々な点で馬と牛の性質は逆である。)
- ② 牛を馬と言う(物事を故意に言い曲げる。)
- ③ 馬に混じりたる牛(他の者とはひとりだけ別物で、仲間はずれの状態にあること。)

(2) 体の各部分

(ア) 頭(かしら)

- ① 馬の頭に牛の頭(異なる物を混同して一緒にし、区別しないこと。)

(イ) 耳 (1)(イ) 参照。

(ウ) 目

- ① 箱根の馬は目から弱る(険しい箱根の坂道を上り下りする馬は、疲労のために目から弱ってくる。)

馬の目に関しては、「馬の眼球は陸上の哺乳動物のなかではもっとも大きく、奥行四四ミリメートル、縦径と横径がおのおの四八ミリメートルあり、その重量は約一〇〇グラムである。この大きな眼は頭の両側に位置し、左右の眼で同時に別々の物体を見ることができる(単眼視)。この様式は鋭い両眼視のできる範囲が狭い代わりに、きわめて広い視野を得ることが可能となる。草原で頸を伸ばし草をはむ馬はそのままの姿勢で肢の間をとおし、頭のすぐ後を除いた約三五〇度にわたって周囲を見渡すことができる。(中略)また、馬の眼は広い視野の限界すれすれのところに向かって動く動物に対して敏感な仕組みになっている。そのため、鳥の飛来とか、風に舞う紙片、あるいは突然動くものに対して多くの馬がビクビクし、本

⁴「牛」との対比を含むことわざは、(2)～(4)にも挙げている。

能的に走り出してしまふ。(中略) この広い視野と動くものへの鋭い知覚は野生時代に後方から近づく肉食動物の接近をいち早く発見し、疾走することによって身を守るのに役立つてきた。しかし、これらの特徴は家畜と化してしまった現代の馬においては臆病な性質となって現れたり、広すぎる視野を時には制限する必要さえ生じている。」(日本中央競馬会競走馬総合研究所(編)(1986):160-162頁)、「広い視野の限界すれすれのところに向かつて動く物体に対しての敏感な仕組みであるとか、いびつな眼球構造のため網膜には遠くを見る場所と近くを見る場所があり、急速な遠近調整が困難である⁵ことなどから、われわれ人間からみれば何でもないような物体や、急激に動くものに驚いたりする性質がある。」(同前:171頁)とのことである。

(工) 角

- ① 馬の角の生えるまで(あり得ないこと。)
- ② 馬の角をやろ(ありえない物を与える。結局何も与えない。)

(オ) 背

- ① 夕立は馬の背を分ける／夏の雨は馬の背を分ける(夏の夕立は激しく降るが、馬の背⁶の片側は濡れても反対側は乾いていることがあるほど降る範囲が狭い。)

(カ) 毛

- ① 馬は赤馬、牛は黒牛、猫は雉猫、犬は白犬(それぞれ最もよいとされる毛色。)

赤馬(赤毛の馬、鹿毛馬)に関しては、「鹿毛(Bay)は、もっとも代表的な毛色であって、被毛は、明るい赤褐色から暗い赤褐色までである。しかし長毛と四肢の下部は、黒色である。」(日本中央競馬会競走馬総合研究所(編)(1986):98頁)、「鹿毛は、洋の東西を問わず多くの人に好まれ、一般的に良い毛色とされてきた。イギリスで貴族用の馬車をひく輓馬として改良されたクリーブランド・ベイは、白い毛がまったくない無地の鹿毛である。軍用に馬が使われていた時代では、白い馬は標的になるとして知られてきた。江戸時代に出版された『馬療弁解』(宝暦九年、一七五九年)にも、芦毛や腕関節の白い馬は、大将の乗馬として不適格と書かれている。しかし、ナポレオンは自己顕示欲が強かったせい、好んで芦毛色を乗馬とした。それ以降、各国の高貴な人々の乗馬には、白い馬が取り上げられるようになったようである。」(同前:95-96頁)とのことである。

(キ) 骨

- ① 何処の馬の骨／馬の骨(どこの誰とも素姓の分からない者。)

(ク) 蹄

- ① 馬は蹄の腐るまで浮く、牛は尾の腐るまで浮く(馬も牛も水には強い。)

⁵「頭を上下し、網膜の最適な部位に焦点を結ばせるようにしなければならない」(日本中央競馬会競走馬総合研究所(編)(1986):167頁)とのことである。

⁶「馬の背」は、馬の背のように左右が深い谷となって落ちこんでいる山の地形のこと。

馬の蹄に関しては、「前肢も後肢も中指（第三指、後肢の場合は第三趾という）のみが巨大に発達し、先端には強靱な蹄をそなえ全体重を支えている。」（日本中央競馬会競走馬総合研究所（編）（1986）：46頁）、「蹄は「ケラチン」と呼ばれる一種のタンパク質でできているが、熱にたいへん強く、五〇〇度Cほどに焼けた蹄鉄を底に押しあててもヤケドをしない。また酸にも強く、強い塩酸や酢酸などにも負けない。さらに、平均四〇〇～五〇〇kgの馬体を支えながら、高速で疾走してもビクともしないように、重圧にも耐える強さを持っている。しかし、この強い蹄にもたったひとつ弱味がある。それはアルカリである。糞尿などで蹄を不潔にしておくと、蹄又腐乱という病気にかかりやすく、蹄角質が腐蝕してしまう。（中略）馬の蹄も、ヒトの爪と同様によく伸び、一ヵ月に約一〇ミリメートルほど伸びて一年で更新する。ふつう約二〇日おきに削蹄して、蹄鉄を打ちかえる。」（同前：61頁）とのことである。ちなみに、蹄鉄に関しては、「多くの異なる場所で、ほぼ同じ時期（具体的に言えば紀元前四～三世紀ころ）に初めて登場したのではないかとする説が、現在むしろ支配的である。（中略）しかし、なぜか釘を使う装蹄技術は、ヨーロッパから東の方へは長い間まったく伝達されなかった。（中略）わが国にも装蹄の習慣は入って来ず、したがって源義経、楠木正成の駆るウマや、織田信長自慢の鉄砲隊と対峙した武田勝頼率いる騎兵隊のウマはすべて、草や藁で編んだ「馬沓」を履いていた。したがって、先のジンギスカンの騎馬軍と同様、彼らも長途の戦に赴く際には、多くの替え馬を引き連れて行ったのである。日本における現代式の装蹄技術は、明治維新後の文明開化とともに始まった。」（原田（1997）：104-105頁）とのことである。

（ケ）糞（くそ）・小便

- ① 錦の袋に馬の糞（見かけはきらびやかだが、内実は醜悪なこと。）
- ② 馬の小便（お茶の出がらしで薄いもの。）

馬の糞に関しては、「健康な馬の糞はほぼ球状で、地面に落ちた際「ポタッ」という音とともに半球状につぶれ、それが数個重ねられ、いわゆる馬糞を形成する。」（日本中央競馬会競走馬総合研究所（編）（1986）：145頁）、「一回に一キログラムほど排糞するのが普通」（沢崎（1987）：87頁）とのことである。また、馬の尿に関しては、「馬は一回に約二リットルの尿を、一日に四～五回排尿する。」（同前：86頁）とのことである。

（3）動作・行動

（ア）走る

- ① 牛も千里、馬も千里／早い馬も千里のろい牛も千里／早牛も淀、遅牛も淀（巧拙遅速の違いはあっても、結局は同じ所に到達すること。）
- ② 馬は濡れ牛は夕日のむら時雨（足の速い馬はいたずらに急いで時雨に降られ、

足の遅い牛は夕日を浴びてのんびり帰る。いたずらに急ぐことを戒めるたとえ。)

- ③ 駆ける馬にも鞭(勢いのついているときに、さらに勢いをつけること。)
- ④ 牛の歩みは馬にも勝る(遅くても着実に進む方が、速くても危険を伴う進み方より優れている。)

馬の走りに関しては、「競走馬は一分間に一〇〇〇メートルを、時速六〇キロで走る。スピードだけならチータの時速七〇〜一一〇キロに負けるが、何十キロも走ることができる持久力は、地上の動物の誰にも負けない。馬が走る能力に優れているのは、その心臓の性能をみればよくわかる。サラブレッドの場合、心臓の重量は平均四七〇〇グラム。体重四八〇キロとすれば、体重に対する心臓の重量比は〇・九八パーセント。この数値は牛の〇・二五パーセント、人間の〇・四二パーセントと比べると、はるかに大きいことがわかる。(中略) エンジン、が強力なら、ガソリン、に当たる血液も特級品だ。赤血球が、一立方ミリメートルの血液中に八百万〜一千万個もあり、人間の四百五十万個〜五百万個の倍もある。しかも、馬の脾臓の中には、赤血球を大量に含んだ血液が貯蔵されていて、走り始めるとこれが血液中に流れ出し、赤血球の濃度はふつうの状態の一・五倍にも高まるのである。」(田中(1989):39頁)、「短い距離をもっとも速く走ることのできる哺乳動物はチーターである。しかし、チーターは背骨をまるめたり伸ばしたり、全身を波うたせて走るためすぐに疲れてしまう。馬はそれほど背骨をしなわせることなく、安定した華麗な走法で走るため、かなり長い距離を走ることができる。」(日本中央競馬会競走馬総合研究所(編)(1986):64頁)とのことである。

(イ) つまづく・ころぶ

- ① 千里の馬も蹴つまづく／千両の馬も蹴つまずき(すばらしい名馬も、時にはつまづく。どんな有能な人でも、時には失敗する。)

(ウ) 踏む

- ① 牛にも馬にも踏まれぬ／馬にも踏まれず(子供が無事に成長してゆく様子。)

(エ) 蹴る

- ① ふくとうの馬に蹴られたるが如し(河豚が馬にけられたような顔。醜い顔が怒ってふくれつらになっている様子。)
- ② 梟の馬に蹴られたるが如し(不平、不満などから頬をふくらます様子。)
- ③ 蹴る馬も乗り手次第(あばれ馬でも、乗り手によってはおとなしくなる。手のつけられないならず者でも、おとなしく従わせる方法はそれなりにある。)

馬が蹴ることに関しては、「馬は蹴る動物というイメージがあるが、馬にとっては蹴るのは防衛本能の表われであり、いわば受け身の行動である。それゆえ、馬が蹴るという行動に出るには必ずその引き金になるような原因がなければならない。例えば立っている馬に、後ろから近づいて急に後軀に触れれば、どんなにおとなしい馬でも、またどんなにしつけのよい馬

でも、無意識のうちに蹴り上げる。しかし、前方から近づき、前軀から後軀へ手をすべらせていった場合には、大抵の馬は蹴らない。つまり何の前ぶれもなく、思いがけない方向から、思いがけない時に、何かの後軀に触れたので、びっくりした馬が本能的に蹴ったということになるのである。」

(沢崎 (1987) : 111-112頁) とのことである。

(オ) 食べる

- ① 馬は飼い殺せ乗り殺せ (馬には飼い葉を十分すぎるほど与え、かつ乗りつぶすほど走らせるのがよい。)
- ② 馬は立つほど飼え、牛はねるほど飼え (馬は勢い立つほど餌を与え、牛は横になるまで餌を与えるのがよい。)
- ③ 馬は夜飼え、人は昼飼え (馬は仕事をさせる日の前の晩に餌を与えておくのがよく、人は働く時に食事を欠いてはならない。)

馬の餌の食べ方に関しては、馬は「一日のうちの長い時間を採食のために費やすもので、少しずつ継続的に餌を食べ続け、その間に短い休止をとるグループ」である「継続的採食者群」に属する動物であり「放牧中のウマの採食状況を観察したデータによると、ウマたちは、牧場内を移動しながら草を食べ続け、実に一日のうち、その七〇%を採食のために当てていた、という。特に、日中の午後一時から二時頃と、夕方の七時前後(夏)の観察では、その時間帯の一〇〇%を採食していたと記録されている。もちろん、これには理由がある。食肉動物の餌に比べると、草は繊維質の消化しにくい材料であるため、採食にあたっては充分に咀嚼する必要があり、また、消化管全体の長さ、容積も、肉食動物に比べると、比較にならないほど大きい。(中略)もうひとつ、草食動物の消化生理に欠かせないものとして、腸管内の微生物の存在がある。これらの微生物は、主にセルロース(繊維質)の分解を受け持っており、これなしに草食動物の繊維質消化は成立しない。ウマでは、これらの微生物の多くは盲腸内に生息しており、二〇時間もかけてゆっくりと分解しているのである。(中略)「馬は夜飼え」という諺は、いうなれば、このウマの消化生理を考え、決まった時間に餌を与えるのではなく、時間をかけて、夜間といえども、採食できるようにしておくべきだ、ということであろう。」(中川 (1988) : 114-115頁) とのことである。ちなみに、馬の好物とされるニンジンに関しては、「ほかの多くの哺乳動物と同じように、ウマも甘みを好む事実はよく知られている。しかしウマの好物と聞いてすぐに思いつくニンジンも、外国ではそれほどでもなく、リングゴや角砂糖の方がウマの大好物としてよく知られている。」(原田 (1997) : 128頁) とのことである。

(カ) 噛む

- ① 噛む馬はしまいまで噛む／食い付く馬は死ぬまで (もって生まれた性格は直らない。)

- ② 噛む馬にも合い口（噛みつき癖のある荒馬も、その性に合った者には馴れる。どんな乱暴者にも相性のよい人がいるということ。）

(キ) いなく

- ① 牛が嘶き馬が吼える／牛は嘶き馬は吼え（物事のさかさなこと。）

馬のいななきに関しては、「人の耳にはヒーンと聞こえる高いいななきは、攻撃的な出会いの際や、性行動中の雄にたいして雌馬が発することが多く、警告的な意味をもっている」と判断される。さらに、ヒヒーンという長いいななきは、遠くに離れた馬同士が呼びあうときにしばしば発せられ、音声のパターンに個体差が認められることから、お互いに声で識別しあっていると推測される。また母馬が子馬を気づかっているときや、雄馬が発情中の雌馬を探索しているときには、低いいななきを聞くことができる。」（楠瀬（1989）：22頁）とのことである。

ちなみに、馬の鳴き声の擬音語は、山口（2002）によれば、奈良時代から江戸時代初め頃までは「い」の音（「い」「いん」「いいんいいん」など）であり、江戸時代初め頃に「い」「ひ」混在（「いひいひ」「いひひんひん」など）となり、江戸元禄ごろ以降から「ひ」の音（「ひん」「ひんひん」「ひひひんひん」など）に変化したとのことである。

(ク) 暴れる・跳ねる

- ① 跳ねる馬は死んでも跳ねる／三歳で跳ねる馬死ぬまで跳ねる（悪い癖は死ぬまでおらない。）

- ② 馬は腹張れば暴れ、人間は腹減れば騒ぐ（馬と人間は対照的な場合に暴れ騒ぐ。）

馬が腹が張って暴れる理由に関しては、「馬の噴門括約筋は他の動物に類を見ないほど強くしまっている。それゆえ嘔吐できない仕組みになっているので、胃の内容物が急に容積を増したりすると胃破裂を起こして死んでしまうことがある。」（沢崎（1987）：82頁）、「馬は胃が小さく嘔吐できないうえに腸が長く、しかも腹腔の中ではしっかりと固定されていないという消化器の構造が原因となって、腹痛（疝痛）を起こしやすい動物である。腸の位置が変わったり、腸が痙攣を起こしたり、寄生虫がつかったり、便秘したりなど、疝痛の原因にはいろいろあるが、食べ過ぎさせないことと、十分に水を吞ませることが予防の要である。」（同前：87-88頁）とのことである。

- ③ 一匹の馬が狂えば千匹の馬が狂う（一人の行動が多数人を誘導しやすいこと。群集は付和雷同しやすいこと。）

馬の群れの暴走に関しては、「ウマは大きな体に似ずとも臆病なところがある動物なので、その臆病さ故にとんでもない狂騒状態に陥ることがあります。（中略）一見ただの暴走にしか見えないこれらのウマの狂騒ぶりも、実はその祖先が広い草原で生活していた頃には、とても有効な防衛本能だったのです。危険なものや普段と違うものを認めたら、自慢の俊足

を使ってとにかくその場から逸速く遠くへ離れることが、生き残るための絶対行動のはずですから。例えそれに気付くのが自分でなくても、群れの誰かがそれに気付いてくれさえすれば、その逃走に便乗できますから自分も安全なわけです。だから群れの暴走が始まると、後先を考えずに我先にとその暴走に参加してしまう習性が残っているのでしょう。そうした個々の生存本能が拡大して、集団暴走の引金になるのです。」(佐草(1995):66-67頁)とのことである。また、馬の視覚上の特徴に関しては(2)(ウ)も参照。

(ケ) 群れる

- ① 牛は牛連れ、馬は馬連れ／馬は馬連れ(同類のものはおのずと連れ立つ。同類のもの同士で事を行うとうまくゆく。)

馬の群れに関しては、「野生で生活する馬は、二種類の性質の異なった群れを形成することが知られている。ひとつは「ハーレム」と呼ばれる群れで、ふつう、スタリオン(種雄馬)としての役割をもつ一頭の雄馬と数頭の雌馬およびその子供たちで構成される。このタイプの群れは、かなり安定しており、たとえなんらかの機会にスタリオンが交代しても、雌馬たちは、そのまま群れを保ち、新しいスタリオンをうけいれて生活し続けることが観察されている。一方、もう一種類の群れは若雄のグループである。これは二～三歳以上の雄馬ばかりの群れで、メンバーの入れかわりもしばしばみられ、一頭一頭が自分のハーレムをもつチャンスをうかがいながら生活している。ハーレムで生まれ育った子馬は、二～三歳の時に家族の群れを離れて行き、雄馬は若雄のグループに、雌馬は他のハーレムに属するようになるのが一般的なようである。」(日本中央競馬会競走馬総合研究所(編)(1986):220-221頁)とのことである。

(コ) 放屁する

- ① 死んだ馬が屁をこく(死んだと思った馬が生き返って放屁する。ほとんど絶望と思っていた事態が思いがけなく好転する。また、絶対にあり得ないこと。)

馬の放屁に関しては、(消化の際の)「ガスの排出には、立位で、運動を伴う方が有利であることは当然で、事実、採食したあとのウマは、かなりよく動くし、そのときに頻繁に放屁が起こることもよく知られている。(中略)ウマを飼った経験のある人ならば、ウマが走行中にかなり頻繁に放屁しているの気づくはずである。」(中川(1988):111頁)、「実際には死んでいるウマが屁をこくことがあるのでしょうか? 死に方にもよりますが、屁をこく可能性がないとは言えない…と、私は思っています。それには幾つかの理由があります。まず第一に、ウマは消化器管(原文ママ)の構造上、ゲップや嘔吐が出にくく、体内に発生するガスは、もっぱら屁で出すしかないこと。第二に、ウマはウシのように反芻をしない分、消化をするための腸管が長くできており、しかもこれがおなかの壁につり下がっ

た状態にあって固定されていないので、腸管がねじれたり変位を起こしやすいのです。そのため、消化管内で内容物が溜まって発酵しガスを発生しやすい状態になること。第三に、その腸管そのものも太い所と細い所が入り組んでいて、これまた消化管内で内容物がたまって発酵しガスを発生しやすくする要因になっていること。…と言ったように、ウマは解剖学におなかの中にガスが溜まり易い構造になっているのです。実際、こうした腸管内のガスが原因でウマが腹痛を起こしたり、死んでしまうことだってあるくらいです。例えば、おなかの中に溜まったガスが原因で死んだウマや、腸管の中に消化途中の内容物が入ったまま死んでしまったウマがいるとしましょう。その死体の腸に溜まっている発酵ガスが、死後硬直で押されたり、緩み始めた肛門括約筋から外へ排出される可能性だって十分に考えられるとは思いませんか？ もっともその現象を放屁と認めるか認めないかは、また別問題ではありますが…。」（佐草（1995）：68-69頁）とのことである。

（サ）木に登る・かごぬけをする

- ① 秋の刈り上げ最中には馬が木登りしても告げるな（収穫時は多忙をきわめ、どんな変事が起こっても顧みる暇がない。）
- ② 馬の籠抜け（無理を承知ですること。）

（4）乗馬・飼育

（ア）馬に乗る

- ① 馬が合う（どことなく気性が合う。意気投合する。）

「馬が合う」は、「元来、本当の馬と、気の合った騎手のことなのである。

（中略）もとは馬乗り用語だった。」（實吉（1988）：240頁）とのことである。また、「ウマは大変頭のいい動物なので、乗り手の乗馬技術や精神的な部分までも敏感に感じとることができます。乗り手はそのウマを愛していて、その力を最大限に引き出してやろうという気持ちを持って接していれば、ウマの方でも極力それに応えようとがんばるものなのです。逆にウマの気持ちを顧みずに、強引に自分勝手な手綱さばきをしようとすれば、いくら名手と言えどもそのウマの本領を十分に発揮させることはできないはずです。また、手綱さばきが技術的に劣っていると見るや、ウマの方でも乗り手を馬鹿にして全然言うことを聞かなかつたり、好き勝手に動き回ったり…と、平然と騎手をなめてかかるような行動をとったりするものです。」（佐草（1995）：70頁）とのことである。

- ② 馬には乗ってみよ、人には添うてみよ／人には会うてみよ、馬には乗りてみよ（馬の良し悪しは実際に乗ってみなくては分からない。人柄の良し悪しも一緒に暮らしたり仕事をしたりしてみなければ分からない。）
- ③ 馬に乗って馬を探す（身近にあるのも忘れて、遠くを探す愚かな様子。）

- ④ 馬に乗るとも口車に乗るな（うまい話には気を付けよ。）
- ⑤ 人の馬に乗るな（他人の所有物に手を出してはいけない。）
- ⑥ 乗り掛かった馬（物事を始めたからには、行くところまで行ってみようとする。いったん関わりを持った以上、途中で身をひくことはできないこと。）
- ⑦ 馬に乗るまでは牛に乗れ（速い馬に乗る前にのろい牛に乗って慣れる必要がある。高い地位につくにはまず低い地位にあって力をつけなくてはならない。）
- ⑧ 馬に乗る者は落ち、道行く者は倒る（馬に乗れば落ちるおそれがあり、歩いて行けば転ぶおそれがある。何か物事をしようとするれば、多少の危険は常に覚悟しなければならない。）
- ⑨ 帰る馬を乗り掛け（物事が調子よく運ぶこと。仕事を終えて帰る馬を見つけ、それに乗るところからいう。）
- ⑩ 馬は上等の馬に乗り、牛は中等の牛を用い、人は下等の人を使え（それぞれに使いやすいこと。）
- ⑪ 馬は武士の宝（武士の戦場での働きは、乗っている馬の力による所が大であるから、武士の宝ともすべきものである。）

（イ）馬から落ちる

- ① 三度目は馬からこけるより早い（三度目の災難は、馬からころげ落ちる時よりも早く来る。）

（ウ）馬方・馬子

- ① 馬は馬方（どんな仕事でもその道の本職が最も有能である。）
- ② 医者と出家は老いたるが良し、馬の口取りと火消しの鳶の者とは若きが良し（仕事や役割にふさわしい年齢のあることのとえ。）

（エ）馬を繋ぐ・荷を負う

- ① 蜘蛛の家に馬を繋ぐ／蜘蛛の巣に荒れたる馬も繋ぐ／腐り繩に馬を繋ぐ（きわめて頼りにならないこと。）
- ② 高荷をつけたる馬の岸の細道伝う如し（不安定できわめて危険なこと。）

（オ）世話

- ① 馬に痩せ馬なし、畑に痩せ土なし（人も物も手入れ次第でその真価を発揮すること。）

（カ）轡（くつわ）

- ① 馬に轡、牛に鼻面（自由を妨げるものがそれぞれにあること。）

「銜（はみ）」と「轡」に関しては、「銜は、ウマの口にかませた金属棒のことだ。棒の両端に手綱や引綱を結びつけ、左右の綱どちらか、または両方を同時に引いたり緩めたりして、ウマを制御する馬具である。騎乗者の意思をウマに的確に伝えるための道具であり、この銜の発明によって、人間は初めて家畜化されたウマを自由自在に乗りこなすことができるようになった。ウマには多くの動物と違って、前歯と奥歯の間にすき間（歯槽間縁）がある。実際にはこのすき間に金属棒を差し込むのであって、上下

の歯にかませるわけではない。(中略) この大発明はしかし、たった一人の天才によるものではなく、今から四〇〇〇年くらい前のころから世界各地で使われるようになったらしい。(中略) わが国の古墳から出土する埴輪のウマについている銜を見ても、大陸から渡来したものであることがはっきりわかる。(中略) 銜という言葉は「食む」から来たと言われる。特にウマの口の中にかませる部分が銜(馬銜と書くこともある)で、それがずれたりするのを防ぐ目的で両端についている金属片や、手綱を結ぶための金輪などを含めた金具一式を轡と称することになっている。けれども、日本語ではこの辺りがかなり曖昧で、銜を「くつわ」と読ませたり、また轡という漢字に「たづな」の意味があると説明している辞書もある。」(原田(1997):98-99頁)とのことである。

(キ) 鞍・鞭

- ① 馬より鞍(馬の乗り心地は馬よりもむしろ鞍の良し悪しで決まる。)
- ② 馬を得て鞍を失う/馬を得て鞭を失う(一方を得たかわりに一方を失う。目的の物は得たけれども、それを活用する手段がなくなってしまう。)
- ③ 三度目には馬の鞍も置き合わされぬ/三度目は馬の鞍/二度目は馬の鞍(一度あった災いはまた来るものでしかもその来方は意外に早く、馬に鞍を置いて逃げる間もないほどである。)

3 終わりに

馬は日本人にとっても身近な動物であった。「馬」を含むことわざの数は極めて多い。馬は家畜として価値が高く優れていると肯定的に捉えられるとともに、無知であり臆病であり癖が多いとも捉えられた。また、さまざまな体の部分や動作・行動を細かく取り上げたことわざが多く、特に飼育や乗馬に関わることわざが多い。

馬は日本人だけでなく、世界中で人間に親しまれまた使役されてきた。『世界ことわざ大事典』(柴田他(編)(1995))によると、他言語・他文化にも「馬」のことわざが数多くある。日本での捉え方と類似のことわざもあり、たとえば、「牛の歩みは馬にも勝る」に類似したものとして「馬に乗って歩く多くの者は、徒歩の者に負かされる」(ベネズエラ)がある。一方、同じ馬の「角」を取り上げたことわざでも、日本の「馬の角の生えるまで(あり得ないこと。)」に対して「馬に角を求める(人はそれぞれの個性や身分に応じた特性を持つ。角を生やした馬はもはや馬ではない。)」(インドネシア・マレーシア)ということわざもある。さらに、「乗せてくれるロバのほうが振り落とす馬より良い(見事な馬も乗ることができなければ何の役にも立たない。)」(ルーマニア)、「種馬の糞のように山盛り(動物や物が山積みになっている状態。)」(アルゼンチン)、「馬が蹴りあっている間にロバが良い干し草を食べている(力が互角の二者が争っている間に第三者が利益を得る。)」(ブルガリア)、「馬のない鞍よりも、鞍のない馬のほうがよい(お金の入っていない財

布より、財布のないお金のほうがよい。）」(ジプシー) などさまざまなことわざがある。

以上、本稿では、「馬」に関することわざを示しながら、「馬」に対する見方や捉え方の特徴を見た。

参考文献

- 朝日新聞 (2014) 「日本固有の在来馬」(朝日新聞朝刊2014年1月4日掲載)
- 北村孝一 (編) (2012) 『故事俗信ことわざ大辞典 第二版』小学館
- 楠瀬良 (1989) 「馬のコミュニケーション」『馬・牛・羊事典』大修館書店
- 佐草一優 (1995) 『ウソ・ホント? 動物ことわざ事典』ビジネス社
- 實吉達郎 (1988) 『動物故事物語 上』河出書房新社
- 沢崎坦 (1987) 『馬は語る』岩波書店
- 柴田武・谷川俊太郎・矢川澄子 (編) (1995) 『世界ことわざ大事典』大修館書店
- 田中延幸 (1989) 「馬牛羊 なんでも事典」『馬・牛・羊事典』大修館書店
- 時田昌瑞 (2009) 『図説ことわざ事典』東京書籍
- 中川志郎 (1988) 『日本の風土を伝えることわざ 動物』創拓社
- 日本中央競馬会競走馬総合研究所 (編) (1986) 『馬の科学 サラブレッドはなぜ速いか』講談社
- 馬場俊臣 (2010) ～ (2014) 「「牛」に関することわざ——牛の何をどう捉えてきたか——」「「虎」に関することわざ類——虎をどう捉えてきたか——」「「兎」に関することわざ——兎をどう捉えてきたか——」「「龍」に関することわざ——龍をどう捉えてきたか——」「「蛇」に関することわざ——蛇をどう捉えてきたか——」『札幌国語研究』15～19 (北海道教育大学国語国文学会・札幌)
- 原田俊治 (1997) 『馬のすべてがわかる本 速い、優しい、立って寝る』PHP研究所 (1991年刊『馬、この愛すべき動物のすべて』改題)
- 山口仲美 (2002) 『犬は「びよ」と鳴いていた 日本語は擬音語・擬態語が面白い』光文社

付記 本稿は、平成26年度北海道教育大学札幌校公開講座「文学に見られる動物たち(Ⅷ)——馬—— 第4回 日本語と馬」(平成26年9月13日)の講演資料の一部に修正を加えたものである。